

庭園の特徴

旧朝倉家住宅の庭園は、大正時代の和風住宅に対応した、庭の姿を随所に残している貴重な作例です。庭園は、玄関前の前庭[ぜんてい]、敷地南側に広がる主庭[しゅてい]、坪庭の中庭[ちゅうてい]に大別されます。

主庭は、西渋谷台地の崖線部にあるため、斜面とその上部平地からなり、敷地外の眺望を借景[しゃっけい]として取り入れ、富士山や目黒川、田園風景が望めるような構成になっていました。主屋からは、額縁に入った絵を見るような庭の景観が意識され、三田用水から引用して流れと小滝を配し、また各種の石灯籠や景石[けいせき]を多用するなど、この時代の作庭[さくてい]の特徴を示しています。



植栽は、アカマツを主木にカエデ類を配し、スダジイ、シラカシなどの常緑樹を交えた雑木林風の景観が意図されていました。現在は主木の枯死[こし]、実生[みしょう]の繁茂、庭樹[ていじゅ]の大径木化などにより変化していますが、元の姿にもどすように努めています。

三田用水から導かれた水路護岸や石組みは、伊豆産の玉石や根府川石[ねぶかわいし]で構成されています。水路底のモルタルには部分的に砂利を混ぜ、水音を発生させる工夫も見られます。

庭園は、石灯籠(上段右写真)などの添景物でも景観がつくられています。主な鑑賞地点から見ると、奥行きのある深い斜面の特性を生かした風景を望むことができます。今回一般に公開するに当たり、庭門を復原しました。(下段右の写真は復原後の現在の庭門)

